

ニッポン ドクター和の 臨終凶巻



『愛は不死鳥』という歌手の布施明さんの1970年のヒット曲を覚えていますか。この歌、本当は平尾昌晃さんが歌うはずでした。

1958年に歌手デビューした平尾さんは「和製プレスリー」と呼ばれ、まさに飛ぶ鳥を落とす勢いでしたが、デビューから10年後に肺結核を患い、長野県岡谷市のサナトリウムに入院します。

戦後の混乱期、肺結核は死に直結する病気で年間10万人もが死亡していました。1950年ごろ、ストレプトマイシン

18 平尾昌晃



長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

た。肺結核からの生還には、それほど決死の覚悟が必要だったので。

平尾さんはこれらの治療を経て復活。当然、肺機能は半分以下に低下していますから歌手としては致命的で、音楽界から消え去ってもおかしくないはずでした。

しかし、平尾さんはこの長い入院生活で、社会福祉の心と作曲の才能を開花させたのです。

「看護師さんや医師、患者さん、見舞いに来てくれた人…。あの時、助けられた体験はお金に換えられない」と、チャリティーゴルフや、福祉音楽イベントを立ち上げます。

復活を祝い、作詞家の川内康範さんがプレゼントした詞が『愛は不死鳥』でした。平尾さんは自ら曲をつけましたが、歌うことはできず「俺の代わり

に」と布施さんにこの曲を託したのです。

その後は作曲家として『よこはま・たそがれ』や『瀬戸の花嫁』、自ら再びマイクを持ったデュエットの金字塔「カナダからの手紙」など、出す曲どれもが大ヒット。「ベッドで安静にしていると、天井の節穴が楽譜のオタマジャクシに見えてきた」と本人が語るように、病の経験があったからこそ、これらの名曲が生まれたようです。

もちろん、肺結核の後遺症とは生涯付き合わねばなりませんでした。2014年には原発性肺高血圧症による肺炎で危篤状態に陥るも復活。その翌年、肺がんが発覚するも体力を考慮し手術は行いませんでした。その後はどこに行くにも呼吸補助器持参で、精神的に仕事をこなしていたようです。

今年7月13日、体調不良を訴えて東京都内の病院に入院。21日に急変し、帰らぬ人となりました。79歳。死因は肺炎。肺結核から50年あまり、まさに不死鳥のような音楽人生でした。

ちなみに平尾さんは3年前、岡谷市にできた看護学校に校歌を提供しています。『未来に向かって』というタイトルです。

不死鳥の音楽人生